

言友会の本棚から②

漫画の中の吃音者の主人公たち(上)

杉本 博幸

聴障者の機関紙に「漫画の中の聴覚言語障害者たち」というシリーズがあり、そのシリーズの⑬で、「吃音の主演たち」を取り挙げていました。その筆者に問い合わせしていくつかの漫画を紹介してもらい読みました。吃音者の私サイドから、かなり独断的な簡単なコメントをつけて孫紹介を試みたいと思います。

「うっちゃれ五所瓦」(ななかま強『少年サンデー』に連載 1988年)

高校の相撲部を舞台にした作品。主人公の五所瓦が吃音者で、自分が通う高校で相撲部を作り大会で優勝する。内に闘志を持ちつつ、ひょうひょうとした性格には、魅力を感じます。ただ、「吃音とはどもるまいとして食べる行為である」という観点からして、この余りにもひょうひょうとした性格の主人公に吃音者としての実感を感じられません。特技を生かし(いわゆる)「明るく前向きに生きる吃音者」の典型のようなのですが、このようなひょうひょうとした性格では、吃音者として被差別の体験がないのではと、現実とのズレを感じてしまいます。フィクションだと言ってしまえばそれまでなのですが、……。



「大器のマウンド」(岩崎健二『少年マガジン』に連載 1977年)

野球マンガです。主人公がかなりひょうきんな吃音者です。ピエロを演じる吃音者には何人か出会ったことがあります。ピエロを演じるというのは、吃った時に受ける周りからの嘲笑をピエロ的笑いの中に昇華させようとしているのではないかと、そのことに卑屈さが込められているのではと反発を感じます。ピエロもヒーローの一つの型ですが、なぜ直接的にヒーローでなくピエロなのか!?と。ただ、この主人公には演じるという感じが無いのです。それで、この主人公にも吃音者としての実感が感じられません。このキャラクターだと、「どもるまい」という意識などありえないと感じさせるのです。

「ろくでなしブルース」(森田まさの『少年ジャンプ』に1988年から連載中)

突っ張りたちを主人公にした漫画です。教えてもらって連載中の作品を何号か読みました。非吃音者の興奮した時のやたらに多い吃音に交じって、吃音者の吃音も確かにあるようですが、吃音ということを意識的に取り上げている感じはしません。吃音者-障害者が日常的に登場してくるということには「共に生きる」ということで意味があるとは思いますが、せっかく取り上げるのならちゃんと吃音者の心理までつかんで欲しいと思うのは、欲張り過ぎるのでしょうか!?もっとも、「けんか」を主題にした漫画にそのようなことを要求するのが、筋違いに違いないのですが、……。

吃音者を取りあげた作品があったら紹介ください。小説なども含め色々感じたことを話せるような場を設けるようなことも言友会でやってみませんか!? (つづく)

を迷惑だと言うことに対し、別のクラスメートをもって「おまえの方が迷惑だ」と言わしめるシーン。男と競争することにやっきになっている女性のブックデザイナーに、その恋人をもって「本に名前が載ることがそんなに大切なことなのか？」と言わしめるシーン。風子を「半人前」と言った男に対し、別の男をもって「一人前」-「半人前」という発想を問題にし、「標準なる人」を設定すること自体を問題にするシーン。風子がラジオのディスクジョッキーに投書したものと勘違いして、店の客が投書で「無理に笑顔を作ろうとせず、ありのままの自分を出せばいい。」と応えるシーン。

また風子に優越感を抱きに店に来る客、風子にオアシスなことを感じ通って来る客をシニカルに描くシーン。これらのことは、「吃音者宣言」の中にある「個性と能力を発揮して生きる・・・」を超えて、そこからもう一步も二歩も踏み込んで、能力を問題にすること自体を問題にしています。



こんなことを書くと堅い作品のように思われるかも知れませんが、あくまでも色々なエピソードを織り込んでの話なので楽しく読めました。

単行本にもなっているので、是非探して読んで下さい。お薦めの作品です。

「かたつむり」(青柳祐介『COM』1969年2月号)

紹介者の話では、これも作者は吃音者との文をどこかで読んだとのこと。そして、その主人公の名前が作者の本名だとか。最近のこの作者の作品(「土佐の一本釣り」が有名です)を読むと、画のタッチも違うのですが、画風が全く違い、どこまでが実体験でどこからがフィクションなのか分からず、どこで変わったのだろうと不思議に思います。とにかく、最近の明るい作品とまるで違い、これほど暗い作品はないと言える位暗い作品です。



話は離婚した相手の女性との再会シーンから始まります。結婚していた時には吃って話せなかったのに、再会した時にはスムーズに話すので、「なぜ？」と問われます。それで、作者の回想シーンとして話が進んで行きます。子供の時からのごくリアルに苦しい吃音者体験が語られています。

そして、そのお見合い結婚した女性が愛し合おうとするばかりに、抑圧者として位置した状況が語られ(丁度、子を思う親が吃音児に抑圧者として立ち現れる

ように)、結局コミュニケーションがうまくいかず離婚して、それを契機に自分の殻に閉じこもることによって吃らなくなったという話です。「かたつむり」という表題は殻に閉じこもることを示しているようです。

吃らなくなって、人の気持ちを無視してペラペラしゃべり、かえってコミュニケーションがとれなくなったという話はよく聞く話ですが、このようなこともあるのかと考えさせられました。吃音者として身につまされる話ではないかと思えます。